

## 編集室から

地域振興のお志事をしていると、滅多に味わえない地域のありのままに姿に出逢える一瞬があります。観光然とした仮初めの光景ではない本物に出逢った時、殊のほか記憶に焼き付けられます。

昨年秋、四万十から一本のお誘いの連絡が入りました。梅原氏と秋田の乳頭温泉に合宿しないかというものでした。梅原氏といえば、週刊誌の表紙を飾ったり、NHKのプロフェッショナルでも取り上げられるなどデザイン・広告業界で知らないものはいない巨匠の一人です。

直接的な仕事からは離れますし、北陸からだとは交通の便が思わしくなく、愛車を一人で8～10時間走らせなければならぬなど、幾つかの思案処はありましたが、新しいご縁や「何か」を求めて、決意しました。

丁度秋田は大雪。それでも、本紙レギュラーの上村さんを訪ねて市内に前泊。当日早めに入り、完全に雪に包まれた秘湯のカットを数々愛機に収めました。乳頭温泉鶴の湯は、以前夏季に日帰りで伺ったことがあります。秋田新幹線田沢湖駅から国道を経て林道に分け入る一軒宿です。こんなご縁でもなければ大雪の季節に行こうとはとても想わないものですが、当日は満室。老若男女、思い思いにお客様が寛いでおられました。

宴会には、氏のご縁で湯守のご主人から直接苦労話を伺い、改めて事を成すには揺るがない信念だけが求められると確信いたしました。

宴会後、氏の提唱で、鶴の湯ならではの日本文化の深遠を体感するセッションにも参加しました。頭の芯から日本・東北を味わうことができた素晴らしい機会でした。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆  
していただいている川畠さん  
が「能登の夜市」の姉妹店を  
開店されました。  
上京された際、ご利用になっ  
てみてください。  
もちろん、川畠さんご自身も  
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara  
03-6427-8183  
17:00～24:00  
金曜17:00～28:00日曜祝休  
渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン  
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/02  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2014/02  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 如 月



東名道PAから一瞬望む富士  
静岡県にて  
by hama

## 濱のつばやき 『開国の地にて』

先月の末、開国の地・伊豆半島下田に招聘頂き、不肖ながら基調講演を仰せつかった。

この時期、北陸には大雪などで交通手段が途絶することがあり、前日からご当地に入らせて頂いた。新幹線を乗り継いで、ほぼ半日。伊豆急下田駅に到着すると、そこには主催者代表の静岡県賀茂地域地域政策局の鈴木局長自ら、休日にも拘らずお出迎えを頂き、局長の自家用車で私的に地域の隅々までご案内いただいた。お連れいただいた処は、実に小生の興味に添った素晴らしい処ばかりだった。一度の面識で我が志向を把握されていること、氏の赴任地に対する熱い眼差しに、感銘を深くした。

当日のテーマは、南伊豆地域の十年後を考えるというもので、講演は能登半島での地域振興活動の事例と、そこから我々が得た知見を聊か披露させて頂いた。内容は吟味に吟味を重ねて絞り込んでいたものの、時間内に収まらず、会場のみなさまのご同意を得て、しばし延長のお許しを頂いて、何とか全てをご紹介差し上げることができた。

その後のパネルディスカッションの変更を余儀なくし、コーディネーターである(財)企業経営研究所常務理事の中山様、パネラー各位を始め関係各位に大変ご迷惑をお掛けしてしまつたことを、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。

\*\*\*

東京五輪招致活動以来、「おもてなし」が流行語化している。通常我々は、厚遇・篤い親切を「おもてなし」と表現している。戦国時代、無為な戦いを避ける手段として、「厚遇・宴席での饗応」が活用された。現代の「おもてなし」=「饗応」という認識は、それ以来の誤解のようである。

「もてなし」は、漢字で「以為」と書く。初出は約千四百年前、聖徳太子による十七条の憲法第一条第一項「以和為貴・和(やわらぎ)を以つて、貴(たつとし)と為す」である。すなわち、「もてなし」の原義は「何(手段・方策)を以つて、何(目標・目的)を為すのか」という国家政策・戦略を指す。単なる饗応というレベルのものではない。

流行語としての「おもてなし」あるいは、それを推進・鼓舞する風潮には、「厚遇・饗応を以つて、当地の好評を為す」的な意味しか感じられないのは、残念である。ほんとうにその程度のレベルで、地域振興に寄与するのか。日本という国は、あるいは地域は、その程度の価値しか持っていないのか。地域に秘された資源を探索・研究し、ブランディングを考慮すれば、答えはどうなるか。

そのためにも、世界を知らねばならぬ。世界の現状・社会構造と、日本とはどこが、どのように異なっているのか。世界を知らぬ日本人目線ではなく、世界各層から見た日本とはどのように見えているのかを。

\*\*\*

局長のおもてなしは、単なる厚遇ではなく、「現地のきめ細やかな案内を以つて、客人に南伊豆への愛着を為す」ものだと想う。

旅の財産は、「想い出」である。

もう一度行きたい。家族を、仲間を連れ立って案内してみたい。目前の客人の記憶に刻まれる体験を共有できないければ、雑多な諸観光地に埋もれ消費されるに過ぎなくなる。多くの観光地が、高度成長・バブルと共に栄え、それらの終焉と共に落ちぶれるのは、「消費された地域」に過ぎなかつたからである。

客人には来訪・愛顧の感謝の意を表して、「有難うございます」といつ。これは、当て字ではない。より正確には、「有る事が難しい事でございます」である。「奇跡でございます」と言っているのと同じだ。

少し冷静に考えれば、「ご縁」と一言で済ませていることの深遠さが理解できる。

毎日全く新しい出逢いが十人だとすると、一億二千万人の日本人全員と出会うには、何年を要するか。答えは、三万二千有余年である。来る日も来る日も一日も欠かさず三千人の新しい出逢いを以つてして漸く百年で全員と出逢える計算である。これが如何に困難であるかは想像に難くない。

つまり、我々は一生かかっても出逢えない人の方が大勢なのである。その中で、出逢つた人・わざわざ訪れてくれた客人とは、どのような人なのか。

現代日本人は、大半がご縁という奇跡性を忘れたのかも知れない。そんな想いをしているだけに、これを会得している方に出逢うと、想いが一段と深くなる。

\*\*\*

いささか大雑把な話になる。人類の歴史を超概観すると、五つの時代に集約されると考えている。

禅宗系寺院にある五輪塔は、下から「土・水・火・風・空」といつ五つの部分から成っている。これがそのまま人類の大きな歴史に該当するという仮(我)説である。

土の時代、人々は狩猟で生活をしていた。

水の時代、人々は治山治水・農業革命を経て、農業で暮らしが安定し、巨大帝国が誕生、文明も興る。

火の時代、人々は動力革命・産業革命を経て、工業という産業を手にした。一方で巨大な力を手に入れ世界大戦も機械化・熾烈になった。

風の時代、人々は計算機・通信革命などを経て、情報産業・金融産業を手にした。一夜にして一代で巨万の富を得る者も続出する時代となった。

空の時代、人々は知識革命・認識革命を経て、すべての産業が知識・知恵をベースにして成長する時代となった。大胆な予想を許して頂ければ、今日既に時代の先端は空の時代を突き抜けたかもしれない。

火：工業時代の熾烈さを思えば、これまでは大きな火の数世紀にあつたような気がする。次は、風の数世紀。つまり、風土・風水・風火・風風・風空と進むのではないか。楽しい空想を巡らせている。

このように観ると、若い世代を中心に、「農・自然」と共にある暮らしが支持される傾向が現れ始めたことも納得がいく。

後の歴史家によって市民革命の一つ、仏革命の始まりとされたバスター・U監獄の襲撃事件当日、参加した民衆は、今日が時代の変わり目の日だと、果たしてどれほど認識できたろうか。

時代の流れとはつまり、そのようなものである。

目に見えない処にこそ、時代の本質が横たわっている。それを見極める「眼」を養いたい。

## きただより62 弘前大学地域社会研究会 上村 康之 『東北新幹線青森開業後の地域状況(3)』

本シリーズ3回目は、新青森駅と八戸駅の間駅である七戸十和田駅の状況をお伝えしたい。七戸十和田駅が立地する七戸町は、青森県東部、八甲田山東麓に位置し、南部藩の小城下町、馬産地として栄えてきた人口約17,000人の町である。もう15年前、シンクタンク時代に総合計画の策定で関わった町でもある。

東北新幹線盛岡以北は、岩手県北と八戸市を通る「東回りルート」と秋田県北と弘前市付近を通る「西回りルート」の選択という3年半のルート論争を経た末、1973年11月に「東北新幹線盛岡以北整備計画」が策定された。その後、国鉄の分割民営化と国の財政事情から八戸～青森間はミニ新幹線案が浮上した。何年かの攻防を経て、1994年の八戸～青森間のミニ新幹線取り下げでフル規格での建設が決定した。やっと当時の七戸駅(仮称)が見え始めた。しかし、本当に現実味が出てきたのは、2002年11月の盛岡～八戸間までの開業である。整備計画決定から実に39年、町は新幹線が来ることを描きつつも何も構想・計画が立案できる状況になかった。この町も、新幹線に翻弄させられたといっただろう。そして、2008年7月に駅名が「七戸十和田駅」に決定した。この名称には十和田湖観光の玄関口、より広域的な駅利用をという地域の願いが込められている。

駅勢圏は隣接する十和田市、三沢市を含む上北地域と下北半島と広いものの人口は、約28万人。「何本の列車が停車するのか」「どのくらいの人が利用してくれるのか」、駐車場の想定は当初300台であった。しかし、開業後、七戸十和田駅の1日あたり乗車人員は2010年が475人<sup>1)</sup>、2011年が497人、2012年が638人と年々増加しており、町の想定よりも若干多いようである。町では駐車場を拡張し730台としたが、無料の駐車場は土曜日、日曜日はほぼ満杯、平日の日中も止めにくい状況であり、それでも足りず臨時駐車場を設けている。この要因としては、当初はあまり想定していなかった青森市東部からの相当数の利用者が大きいことや、六ヶ所村の日本原燃関係や下北半島の原子力関係の利用者が、東北本線の特急停車駅であった野辺地駅や三沢駅から七戸十和田駅にほとんどがシフトしているとのことである。野辺地町から大手レンタカー会社Aとタクシー会社1社が撤退、私もかつてよく利用した駅前の名物食堂でも客が激減し、1日に1人という日もあるという。野辺地町では「新幹線開業で客が減ることを予想していたが、これほど大きく減るとは想定以上で大打撃」で町経済に与える影響が大き過ぎるとのことである。

また、先にみた2012年の638人の乗車人員のうち定期利用が68人あり、七戸町付近から青森市や八戸市に新幹線通勤通学している値も見逃せない。七戸町にはこれまで鉄道がなく、両市に公共交通機関による通勤通学が現実的に厳しかった。車でも冬季では、1時間半から2時間が見込まれる。それが七戸十和田駅から八戸駅に12分、新青森駅に15分となり、劇的に変わった。適切な例えではないが、1982年に東北新幹線開業時の宮城県古川が仙台駅との時間距離の大幅短縮により仙台市の通勤通学圏に組み込まれ、スケールの差があれ似た動きとみる。

しかしリーマンショック、震災という流れから青森県でも観光客の減少傾向が続いており、七戸十和田駅が十和田湖への玄関口としての機能を果たしているとは言い難い。町では駅から約2.5km南にある旧城下町の中心部に観光客を誘導しようと、観光タクシーを創設したが利用者がなく廃止した。駅開業と中心部活性化が結びついていない状況もある。

新幹線開業から3年が経過し、明と暗が入り混じる七戸十和田駅の今である。

1)2010年12月4日～31日までのデータより算出されたもの

参考資料 青森県(2009):東北新幹線全線開業への道のり、『平成21年版よくわかる青森県』、110-119。

## 『人と会社について考えたこのひと月』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

皆様あけましておめでとうございます。

本年もどうぞ他愛もない私の戯言にお付き合いください。

さて新年があけて早々に飛び込んできたニュースが「社長、実は私癌が見つかり、来週から入院して手術となりました。」恵比寿の蕎麦屋で働いてもらっている65歳の男性スタッフからの新年の挨拶がこれでした。

それから約一カ月、他のスタッフのシフトを調整しながら朝から14時まで恵比寿のランチに出て、夜は手薄となった店に出向き、最後は目黒の店の×作業をして自宅に帰るのは2時過ぎ。相当疲れます。いやもう疲れしました。そして思った事「会社=人である。その人に何か問題が生じた場合のリスクははかりしれないな」ということです。

今回の件については、1週間前に事前に報告があったこと、運よく早期発見で手術も成功し、2月から現場復帰ができそうなため、一定期間私や他のスタッフが穴埋めすることで何とか対処できましたが、これがもし、突然の事故や失踪などが起きた場合を考えるととても安心して眠れません。

仕事を分け合うことで一人当たりの労働時間を短くし、かつ雇用も担保するというワーキングシェアの概念がありますが、大学院時代に雇用政策についても研究をしていた私は「結局それは大企業の話でしょ」と思っていました。しかし、企業の大小関係なく事業継続する最も重要な資源は“人”です。当社のような、従業員一人に対する依存度が高い業態ほど、『ワーキングシェア』の重要性を説き、リスクに備える必要があると感じました。

最後に、何事も経験してみても初めて、その意義と必要性に気付く事って多いですね。私なんかは特に頭ごなしに決めてしまう事が多いので、いつも自分の浅はかさに辟易することがあります。

政策立案を行う官僚や自治体職員の方々には、政策の妥当性を検証する目を養ってもらうためにも、現場(市場)に従事してみるという実体験が欲しいものです。

由布院への里帰りを欠かした年は静岡県に戻って早15年が過ぎるけど一度もない。でも、今回のななつ星に乗っての由布院入りは格別なものがある。

駅を降りると改札口のない由布院駅ホームは人だかりだった。由布院駅は磯崎新が設計したものだ。改札口がないのは、人を迎える由布院の入り口たる駅にいきなりゲートは、あってはならないとの考えからだ。だから、九州の観光列車に先鞭をつけた「ゆふいんの森号」が着くときには駅員総出でお客の手から直接に切符を受け取ることになっている。

今回は、もとより切符など持っていない。駅員は改札替わりに見物客の整理に大奮だった。

駅舎内に入ると溝口薫平さん、桑野和泉さんから多くの顔見知りや満面の笑みで迎えてくれた。「Qさんおかえり」との声がかかる。最も嬉しい時だ。



翌日10月16日の西日本新聞には、このことを報じていた。平成10年3月26日に大分合同新聞が小生の送別会を記事にさせていただいて以来、すでに15年の月日が流れている。由布院の駅前の風景は、以前より整えられ変わってきてはいるけど、お互い歳を重ねたものの変わらぬかつての仲間にもまれることが何より嬉しかった。

ゆっくり皆と話していたかったが、駅前にはすでにななつ星専用のバスが待っていた。

ここからは3つの選べるプランが用意されている。列車滞在プランで、ラウンジカーでティータイムを楽しむ、列車は由布院駅～庄内駅を往復している。そして由布院散策プランとして2コースがある。一つは由布院観光を代表する金鱗湖散策後、天井桟敷でのティータイムだ。由布院スピリッツの源である天井桟敷は是非行って欲しいところだ。古民家、グレゴリア聖歌、小鹿田焼の大皿に一輪の山茶花が天井桟敷をイメージするキーポイントだ。懐かしさ、珍しさ、意外性が散りばめられている実に心地いい空間と美味しいコーヒーをいただくことができる。

今回はあえて山荘無量塔のアート空間「アルテジオ」を見た後、カフェ



「テテオ」でのティータイムを選んだ。こちらのコースに来たのは28人の内8人だった。

こちらのコースに初めてお客を乗せるななつ星専用バスが待っていた。列車と同じ古代漆色のピカピカのボディに内装は天井から床までふんだんに木が使用され、シートのデザインは個々に違うものになっている。トイレも用意されている。

「アルテジオ」は小生が由布院にいた時にはなかった。空想の森美術館があったところだ。そこがすっかり生まれ変わっている。マティス、ジョン・ケージ、マン・レイの作品が、音楽と共に展示され、アート関連の図書を揃えた読書室も用意されている。この書棚に日本古民家全集が目があった。「山荘無量塔」をデザインするにあたり参考にされたことが容易に推測される。ゆるりと由布院の時を過ごすに素敵な装置に、アルテジオはできあがっている。

アルテジオから戻ってくると、駅のアートホールという名の待合室は神楽の舞台と客間に変身していた。アートホールは毎月ごと選抜された作家が展示を行っている。今はもうないけど「ゆふいんの森号」にはその作家の作品を展示するアトラウンジカーといった車両が用意されていて、博多駅から「ゆふいんの森号」に乗ったとたん由布院が始まるといった趣向だった。そして、月替わりの作家を囲んで駅アートホールで夜パーティを開いていた。パーティーの最中に列車がホームに入ってくる姿が縦長の窓から目に入り、それ自体も絵になっていた。

この夜の出し物は、由布市庄内町の平石神楽座が舞う最も勇壮で人気の高い“やまたのおろち”伝説だった。高天原を追放された須佐之男命(すさのおのみこと)が、美しい娘(櫛名田比売(くしなだひめ))が八頭八尾の大蛇(やまたのおろち)に食べられるところを、結婚を条件に救うという神話。大蛇に酒を飲ませたあと太刀を振り回し退治、そのとき退治した大蛇の中から出てきた刀が「草那芸之大刀(くさなぎのたち)」で、これを「天照御大神」に献上したとさ。

勇壮な舞を盛り上げるご年配の方が叩く太鼓に驚いた。全く疲れを知らないようだ。皆、大満足の歓迎の神楽の舞だった。心から感謝申し上げた。(つづく)

